

あとがき

本プロジェクトによって、韓国・カナダ・イギリス・オーストラリアにおける国際教育の現状——具体的に言えば、これらの国々で「政策的に国際教育を通じてどのような資質・能力を培おうとしているのか」、そして「そのような資質・能力を培う国際教育を実現する為に政策と学校の間でどのような橋渡しがなされているのか」、さらに「学校現場では実際に国際教育のカリキュラムや授業がどのように実践されているのか」について報告することができました。これらの成果は、研究チームであった国際協力機構（JICA）、文部科学省・国立教育政策研究所、そして各国の教育事情や世界的な教育の動向に精通している調査研究協力者、有識者、埼玉県教育委員会）、そしてなにより研究の推進に大車輪の活躍をされた国際開発センター（IDJC）の方々の尽力の賜物に違いありません。本報告書は、日本の国際教育の充実のために貴重な知見を提示するものであると確信しています。

今後、国立政策研究所においては「研究成果をこれからの日本の教育政策にどう生かし、教育課程をデザインし実体化していくか」という宿題に、国際協力機構においては「日本の国際教育を充実させるため、研究成果をもとに国際教育への取組や支援の在り方を具体的にどう改善していくのか」という宿題に取り組むことになるでしょう。本報告書を手にした多くの方々も、それぞれに自らに課せられた宿題に気づかれることと思います。今回のプロジェクトで蒔かれた種が、遠くない将来、色とりどりの美しい花を咲かせ、豊かに実を結ぶのを期待したいと思います。

私自身も宿題を見つけました。「子どもたちにとって、これからどのような国際教育の実践が求められるのか」という宿題です。でも、この宿題は私だけでなく、国際教育に携わるすべての方々への宿題なのかもしれません。これまでも国際教育の素晴らしい実践が様々に取り込まれてきました。しかし、先の読めない時代になり、国際間の協調にも暗い影がさす昨今、これまでの実践をもう一度問い直す時期にさしかかっているのかもしれない。

一例ですが、私は近頃、歴史の教科書や学習指導要領にも見られる常套句「民族や宗教をめぐる対立」「宗教・民族を巡る紛争」といった表現が気になって仕方ありません。単に宗教や民族が異なるだけで対立や紛争が起きるのでしょうか。私は人間がそこまで愚かだとは思いません。対立や紛争が起きるのは、その根底に人間の尊厳、基本的人権を踏みにじる差別・偏見・格差・不公平などがあるからに違いありません。「民族や宗教をめぐる対立」「宗教・民族を巡る紛争」といった表現は子どもの目を本質から逸らします。事実、国際協力機構をはじめとした様々な国際協力の活動は、差別・偏見・格差・不公平との闘いに他ならないのではないのでしょうか。

学校や教室にも差別・偏見・格差・不公平はあります。いじめや暴力はその最たるものでしょう。子どもにとって、学校や教室は世界そのものです。その意味で、自分の世界で生じた差別・偏見・格差・不公平から目を逸らさず、声をあげることのできる子どもを育てること、これが国際教育の第一歩だと思います。身の回りで起きる「自分事」の問題、人間の尊厳や基本的人権に関わる問題に声をあげられないで、どうして広い世界の差別・偏見・格差・不公平に立ち向かうことができるでしょう

か。声をあげる人，立ち上がる人，欧米では“UPSTANDER”という表現をよく見かけるようになりましたが，身の回りに様々な形で存在する差別・偏見・格差・不公平を自分事として見逃さず，積極的に異議を唱えることができるように子どもを育てることが国際教育の原点ではないでしょうか。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから，人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章前文の後には「ここに終わりを告げた恐るべき大戦争は，人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し，これらの原理の代りに，無知と偏見を通じて人種の不平等という教養を広めることによって可能にされた戦争であった」と記されています。今こそこの反省を思い返し，これからの国際教育がどうあるべきかを再考する時期なのかもしれません。

2024年7月

成蹊大学
二井正浩